

第1部 これ、修理できる?できない?



壊れたモノがつながく、新しい出会い —オランダ発「リペアカフェ」の魅力—

ウェブメディア「IDEAS FOR GOOD」(ハーチ(株))クリエイティブ・ディレクター 瀬沢 正人



写真1 リペアカフェの様子 (Image courtesy: Repair Café Jeltje)

捨てるのはまだ早い? 修理から始まる物語

ちょっと背伸びして買った、とっておきの服、大切な人が贈ってくれた時計、一人暮らしを始めたときから使い続けた家電。そんな思い出のあるモノが壊れてしまったら、あなたは どうするだろう。部屋の片隅に転がしておいたり、引き出しや押し入れの中にしまい込んだり…あるいはもう使えないからと、寂しい気持ちでそれらを手放すこともあるかもしれない。

「壊れたモノにもう一度命を吹き込めたら」。そんな願いを叶えてくれる場所がある。それが、地域のボランティ

アがあらゆるものの修理を手伝ってくれる場所——オランダ発祥の「Repair Cafe (リペアカフェ)」だ。

リペアカフェは、オランダ全体で500か所以上、アムステルダムには40~50か所存在している。人々はここに壊れた家電や服、自転車など、ありとあらゆるものを持ち込み、地域のボランティアがそれらを無償で修理しているのだ。また、ここには修理をしたい人だけではなく、コーヒーを飲みたい人、ただおしゃべりを楽しみたい人など、色々な人が集う。市民にとって心地よい居場所にもなっている。

リペアカフェでは日々どのような

のが持ち込まれ、どのような物語が生まれているのだろうか。

今回の記事では、オランダのリペアカフェに1年間密着取材して制作した、IDEAS FOR GOODのオリジナルドキュメンタリー映画『リペアカフェ』をもとに、同映画の制作者であり、オランダ在住の筆者の視点からリペアカフェの魅力を紹介する。具体的には、現地のリペアカフェの様子や、サーキュラーエコノミーに人々を巻き込むためのポイント、さらに日本でリペアカフェを始める際の課題や参考になる点について掘り下げていく。

現地のリペアカフェに潜入!

それでは、実際にオランダのリペアカフェに足を踏み入れてみよう。

リペアカフェは、公民館など公共の場所で開かれることが多く、主に月に1回もしくは週に1回開催されている。修理対象として持ち込まれるものは家電、衣類、自転車、家具など、さまざま。拠点の規模や特徴によって、修理できるものが異なる。例えば、都市部にあるリペアカフェでは家電や衣類の修理が多いが、地方では車の修理を行うところもある。

今回はアムステルダム市内の住宅街の、とある拠点を例に取ろう。ここでは公民館の30名ほどが入る部屋を使ってリペアカフェを毎月開催している。訪問者が壊れたものを持ってやってくると、リペアカフェの受付担当者が「こんにちわ!」と元気に挨拶して迎えてくれる。受付で手渡されるのは修理依

頼フォーム。ここに名前や連絡先、持参したもの、メーカー名、状態等を記入する。最後に免責事項にチェックをつけ、作業の責任がものを持ってきた依頼人にあることに同意する。これで修理を担当するボランティアは安心して作業を始めることができ、依頼人もリペアカフェでの修理が有償の「サービス」ではないことを理解できる。



写真2 リペアカフェの様子



写真3 自転車のリペア
部屋の中には4つのテーブルに区割りされていて、①家電、②衣類、③自転車、④その他に分かれ、それぞれのテーブルに修理人が1人から3人ほどついて修理を行なっている。彼らのほとんどはプロの修理職人ではなく、近所に住む手先の器用な人や、ものづくりやDIYが好きな人で、自分の直せる範囲で修理を無償で手伝っている。賑わう時間帯には行列ができるほどで、番号札をもらい、近所の人と挨拶を交わしながら待つ。順番が回ってきたら受付のボランティアが依頼人を空いたテーブルに案内してくれる。

時間をともにすること

テーブルにつくと、担当の修理人が優しく運び込まれたものの状態や壊れたときの状況などを聞いていく。製品の説明書を持っていない場合は、一緒にスマホを使ってウェブ上に説明書がないか調べたり、なかなか開かない電池の蓋を協力して開けたり、洋服の穴を塞ぐパッチをどれにしようかと選んだりする。誰かと一緒にこうした作業をするのは初めてだという人も多いが、この修理するプロセスを共有する時間が楽しいのだ。



写真4 リペアカフェに来たシリア出身の男性。都市で孤独を和らげる場所としても機能している

こうした修理のあり方は「コミュニティ・リペア」と呼ばれ、いわゆる通常の修理屋さんに対価を払って後日修理されたものを受け取るだけの「サービス・リペア」とは一味違う。リペアカフェの依頼人と修理人との間で交わされるのは、お金ではなく、修理のプロセスで紡がれる会話であり、人やものとの触れ合いから生まれる関係性なのだ。壊れている原因がわかったら、修理方法を、修理人と依頼人であれこれ相談しながら実際に修理に取りかかる。修理には時間がかかるものもあり、

例えばコーヒーメーカーは製品内部の仕組みが複雑なため、2〜3時間かかってしまうことも珍しくない。そんなときは、リペアカフェのボランティアが無料で出してくれる温かいコーヒーや甘いチョコレートを頬張りながら、隣で同じく修理に奮闘している人と「もうちょっとでこの歯車が回りそうだ」「実はこのアクセサリは幼い頃に祖母からもらった思い出の品なんだ」などと、おしゃべりに花を咲かせる。



写真5 若い女性が祖母から受け継いだと言語のネックレス

こうした時間をともにするからこそ、修理ができたときの喜びはひとしおだ。思い入れのあるニットに空いてしまった穴が綺麗に直ったときの嬉しさや、スイッチが入らなかったケトルから湯気が出てきたときの達成感は何とも言葉には言い表せない。

人によっては握手やハグをして喜びやお礼を伝える人もいれば、帰り際、受付横に置いてある寄付箱に「ありがとう」と心からの感謝とともに、お金を入れていく人もいる。リペアカフェではこの寄付を元手にして工具やお菓子などを用意しており、感謝の気持ちが巡る場となっている。



写真6 修理のお礼の形は寄付だけではない

リペアカフェの始まり

リペアカフェは、2009年にオランダの首都アムステルダムで生まれた。きっかけはオランダ人のジャーナリスト、マルティヌス・ポストマ氏が、とある修理に関する展示を見て、その記事を書いたことだった。

彼女は、モノにあふれた現代の暮らしの中で、「壊れたら捨てる」文化が当たり前になりつつあることに疑問を抱いていた。修理を日常の習慣にする

素晴らしいさを実感した彼女は、修理やDIYが好きな友人に声をかけ、自宅近くのスペースを借りて試験的にリペアカフェを開催した。

その結果、イベントは見事に大成功。壊れたものを持ってきた参加者からは修理を手伝ってくれたことへの感謝と、同じような取り組みがもっと多くの場所で広がってほしいという声が多く上がった。これを受けて、2011年に彼女は「リペアカフェ・インターナショナル」という財団を立ち上げた。普及活動を始めると瞬く間に大きな反響を呼び、現在世界40カ国、3,500カ所以上に広がるムーブメントになったのだ。

人を循環の輪に巻き込んでいく

なぜこれほどまでにリペアカフェは人々を巻き込むことに成功しているのだろうか。アムステルダムに住みながら、



写真7 アメリカ、タイ、ウクライナのリペアカフェ (Image courtesy: Repair Café International)

リペアカフェをテーマにドキュメンタリー撮影を行なった筆者の経験から、3つのポイントを見ていく。

一つ目は、アクセスのよさである。リペアカフェは、ショッピングモールやイベントスペースや地域センターなど、市民の生活動線上で開かれ、参加費は無料もしくは少額の寄付となっている。そのため、老若男女問わず、通りがかりの人も参加しやすい。市としても、サーキュラーエコノミーに関連する取り組みとして、開催場所の提案や貸し出しなどをサポート。また、毎月決まった曜日や時間帯に定期的に行うことが多く（例えば第1水曜日19時から22時まで）、これにより参加者は毎回の開催日時を確認する必要がなくなり、口コミで広がりやすくなっているのだ。

2つ目は、手触りのある価値の体験だ。リペアカフェは、関わる人自身にとっても、社会にとっても、活動の価値が実感できる場となっている。例えば、「壊れたものを安く直して使う」という経済的な価値に加え、目の前で修理されるモノを見ながら、「環境にとっても良いことをしている」という心地よさを



写真8 リペアカフェ発祥の地 オランダの首都アムステルダム

得ることができる。また、修理を手伝うボランティア側も、目の前の修理が成功して喜ぶ人から直接感謝されることで、「自分が地域で暮らす誰かの役に立っている」という実感をもつことができる。

3つ目は、多様な楽しみ方が用意されていることだ。リペアカフェは、関わる人のモチベーションのレベルに応じて、さまざまな楽しみ方が用意されている。会場を見渡すと、修理をしにきたのではなく、ただコーヒーを飲んで話しているだけの人もいる。そして、自分自身もボランティアになりたいと思った人に対しては、修理の基礎を学ぶ講習会が開かれたり、修理のプロセスをそばで観察する機会を設けたりする。このように、さまざまなモチベーションをもつ人を歓迎するために、入り口のハードルは低く設定され、各々にとってのリペアの楽しさを感じてもらいながら、徐々にモチベーションを高めていく仕組みがある。

リペアカフェの活動を見ていると、①アクセスのよさ、②手触りのある価値体験、③多様な楽しみ方といったポイントを組み合わせ、「気づいたら循環の輪の中に入っていた」という体験をデザインしているように思う。これらの視点は、企業や行政のサーキュラーエコノミーの取り組みにも活かせる可能性があるのではないだろうか。

日本でもリペアカフェが続々誕生！

「リペアカフェを私の住む地域でもやってみたい！」



写真9 亀岡市で小学5年生がバッグの修理に挑戦

映画『リペアカフェ』の上映会後、こうした声が全国各地から寄せられている。京都府の亀岡市や、茨城県の水戸市などでは、上映会をきっかけに、地元の企業や行政、市民が一堂に集まり映画を観た結果、インスパイアされた方が中心となって、地域性を活かしたリペアカフェが生まれている。

亀岡市では、2024年末に地元企業が試験的に開催したリペアカフェが好評だった。25年度からは行政が予算を新設し、継続を支援する。地域活性化やごみ削減への貢献が期待される。

水戸市では、シニア層が活躍できる場づくりを行うNPOが、普段定期開催している物々交換市に合わせてリペアカフェを実施。定年退職した男性の参加も多く、修理を通じたコミュニティの広がりを感じている。

リペアカフェを始めるためのアイデア

一方で、リペアカフェを新しく始めようとすると、様々な課題が立ちちはだかる。ここでは、自分の近所でリペアカフェを立ち上げてみたいと思っているものの、なかなか踏み出せないという方に向けて、立ち上げの際に直面し

やすい課題を3点に分けて整理し、それらに対するアイデアを紹介したい。

一つ目の課題は、場所の確保だ。リペアカフェは定期的に行うことで広がり生まれる。しかし、民間のスペースを借りる場合は費用がかかるため、場所の確保が難しく感じるかもしれない。そのため、まずは無料で利用できる図書館や公民館など公共の施設に相談してみるのはどうだろうか。また、個人で営んでいるカフェや地域のコミュニティスペースと提携し、営業時間外やオフピークの時間帯を活用する方法もある。店舗側にも集客や認知向上のメリットがあり、双方にとってWin-Winな関係を築けるかもしれない。

2つ目は、活動資金の確保だ。リペアカフェを運営するには、修理道具の購入費や会場使用料、飲み物とお菓子



写真10 多くのリペアカフェはFacebookなどのSNSでイベントの告知を行っている

の提供や広報にかかる費用をどう賄うかが課題となる。しかし、前述のように会場を無料で確保できれば、実は費用はそこまでかからない。修理道具は、家にあるドライバーや裁縫道具を持ち寄るところから始めることができる。交換用の部品が必要になったときは、依頼人に「ここで手に入るの、購入して次回また持ってきてください」と案内すればよい。他の費用は、修理が終わった後に参加者から任意の寄付を募ったり、飲み物付きで500円ほどの参加費で参加できるようにしたりして賄うのもよい。実際にアムステルダムのリペアカフェでは、寄付のみで運営しているところもある。

さらに、地元のホームセンターなどに相談し、交換部品や工具の提供、資金援助を受けるのも一案だ。企業にとっては、地域密着で貢献をしながら、認知を高めるチャンスとなる。ちなみに、オランダのリペアカフェ・インターナショナルはリペアカフェを「誰でも参加できる無料（もしくは寄付制）の場所」としており、できるだけ参加のハードルを下げるのが良いと筆者は考えている。

3つ目は、修理人の確保である。特に家電のリペアには一定の知識や経験が必要だ。もしも周りに詳しい人がいなければ、比較的ハードルが低い、洋服のお直しから始めることをおすすめする。日本ではミシンや裁縫道具の使い方を義務教育で教えているため、一度は習ったことがある人がほとんどで始めやすいだろう。なお、オランダで

は裁縫やミシンは義務教育として教えておらず、リペアカフェに来て初めてミシンに触る人が少なくない。

一度リペアカフェを始めると、知合いの紹介などで多様なスキルをもつ人が徐々に増えていくことが多い。まずは数人でもいいので、始めてみることで見えてくる想像以上の広がりや新しい発見があるはずだ。それでも心配な場合は、最初から「修理」ではなく「ものを綺麗にする」ことから始めてみるのもよいだろう。簡単なクリーニング道具を持ち寄って、誰かと一緒に靴や自転車を磨く中で会話が生まれるかもしれない。

最後に付け加えるとすれば、「無理なく続ける」という心の持ち方が意外と大切だと感じている。そもそもリペアカフェはボランティアで運営されており、オランダでは「リペアカフェで直ったらラッキー」程度の気持ちで参加する人がほとんどだ。つまり、直るかどうかという結果だけでなく、そのプロセスを誰かと共有することを楽しむ場でもある。そのため、「リペアできる“かも”」くらいの心持ちで参加者には気軽に来てもらい、ボランティア側もあまり肩肘を張らずに、月1回ぐらいのペースで無理なく続けるのが良いと筆者は思う。

最後に

本記事を通じてオランダのリペアカフェの様子や魅力が伝わり、日本でもリペアカフェを始める人が一人でも増えれば、これほど嬉しいことはない。

リペアカフェ・インターナショナルでは、リペアカフェの始め方についてまとめたスターターキットを販売している。関心のある方はチェックしてみることをおすすめする。（英語版のみ。参考文献にリンク有。IDEAS FOR GOODでは日本語版スターターキットの制作について同団体に相談中。）

また、日本ではリペアカフェという概念自体を知らない方もまだ多いだろう。映画『リペアカフェ』では、現場に行かなければ感じられないリペアカフェの魅力を映像に詰め込んだ。興味のある方は下記からチェックいただけたら幸いだ。

映画『リペアカフェ』 ～修理したいのはモノだけじゃなかった～

お店では修理を受け付けてくれない
壊れた家電や服、自転車など、あらゆる

ものを地域のボランティアが無料で直してくれる、オランダ発祥のリペアカフェ。実は彼らの役目は、モノを修理するだけではない。

離れ離れになった家族の「思い出」、疎遠になりつつある地域の「コミュニティ」、捨てることを前提に成り立つ消費社会の「システム」…

リペアカフェにはどのような人とモノが集うのか？壊れかけた「モノ以上のもの」を直す人々の物語がここにある。

【アムステルダム地域映画祭 2025

ノミネート作品】

同映画は誰でも上映会を主催できる。
予告編等 詳しくは下記特設ページへ。
下記のQRコードをスキャン、または
<https://ideasforgood.jp/documentary-repair-cafe/> にアクセス。



写真 11 映画『リペアカフェ』特設ページ QR コード

参考資料

Repair Café International 公式 HP, <https://www.repaircafe.org/en/>（閲覧日 2025 年 2 月 27 日）
NHK WORLD The repair renaissance: how fixing made a global comeback, <https://www.3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/videos/20250214211054467/>（閲覧日 2025 年 2 月 27 日）